

開けた林の前に石造りの小さな門らしきものがある。舗装された道が林の奥の闇へと続いており、その光景が今の時間帯では微妙に不気味であった。まるで異界へと続いているように感じる。その先の異界と、現世を区別するためなのか水色のポールが控え目に二本。その右側には大きな石碑のような、文字が刻まれた石が鎮座していた。

——『西原自然公園』

黒いタイルにはそう刻まれている。

僕は微かに寒さを覚える中、舗装されている道を歩き出した。

私は西原自然公園の前まで来ていた。

公園入り口の正面にある車道の奥に、電柱が何本か立っている。灯りらしい灯りはそれくらいしか見当たらず、公園の中は恐らく真っ暗闇であることが予想される。小学生の女子がこんな時間に、こんな林の中に入っていくということは、若干の抵抗があったけれど。

「行かなくちゃ」行く理由なんて、無いのだけど。

水色のポールを潜り抜け、闇の中へと足を踏み入れた。

あたり一面は闇だった。

上も下も、左右、全てが真っ黒で、ぼっかりと穴があいているように感じる。そもそも、上下左右という概念があるのかもわからないくらいに真っ暗であった。

けれど人間というものは、本能的に、昔ながらのDNAが残っているのか、不思議と何にぶつかるわけでも無く、道に迷うことなく僕は歩き続けた。

一歩。また、一歩。

ザツという足音が響く度に、僕は様々なことを思い出す。

いままでのこと。

これからのこと。

——星のこと。

ふと、僕は、上を仰ぎ見た。

もちろん空は、木々に覆われていて、闇色であった。星の光さえも、月の明かりさえも、夜空の藍色さえも通してくれない。

まるで敵に囲まれているような感覚だ。

でも、不思議と、安心感というものが、僕の中にはあった。

星との約束の場所。

星の見える場所。

「行かなくちゃ」

遅すぎると分かっている。

静まり返る林の中、私の足音だけが音を生む。周囲は音の出し方を忘れてしまったかのように無音で、虫一匹鳴いていない。いや、鳴いていないというのではないのだろうけど……。私の耳にはそれが入ってこないのなら、鳴いていないと同じことだ。きっと、彼も——智くんも同じことを言うだろう。間違い無く。

私は一度足を止めた。辺りから音は無くなり、全てが静止したように感じる。

——智くん。

その名前を心の中で呟きながら、私は俯いた。けれどすぐに、上を向く。まるで涙が零れないようにするような動作だったが、そういった類の物は、私の目から流れ出ることはなかった。

ただ、溢れ出るのは消失感。

胸のあたりにぼっかりと、穴があいてしまったような感じ。

ああ、どうして私、こんなところにいるんだろう。

こんな時間に、こんなところに来たって、

「会えるわけじゃないのに」

私、何やってんだろう。でも——行かなくちゃ。

道なりにやや進むと、空が、視界が開けた。

「わ……」

思わず声が出ってしまった。

藍色の空に瞬く星々。半分に欠けた月。大空に零した金平糖のように、甘い光の粒が輝き続けている。空を全て白で覆い隠してしまいそうなくらいに、それらは発光していた。

本の中の世界に紛れ込んでしまった。そう思わざるを得ない。

周囲に聳え立つ木々が壁のようになっており、まさにプラネタリウムだ。さながら僕は星を映す映写機である。僕の瞳には、瞬く星々を映し、瞬きさえも忘れる。

不意に。

星屑が流れ落ちるような気がした。

映写機である瞳から、流星のように流れた星屑は、頬を伝ってミルクィウェイを描きながら、地面に吸い込まれていく。それだけだった。それ以上は何もなかった。何も出な

った。

一度きりの星屑。

落ちた星屑を眺めるように僕は下を向き、乱暴に制服のネクタイをはぎ取った。その行為に意味はなかったが、星が関係していることは明らか、なのかも。

ああ、僕の隣には――

「誰もいない」

僕の右手は、空虚しか掴めない。

星すらも、捕まえることが出来ない。

「あ……」

私の視界はたくさん光源に当てられ、瞬きの回数を僅かに増やさせた。

「綺麗」

小学生の子どもにはもったいないくらいなの、星空が一面に広がっている。

思わず私は左手を空へと伸ばし、何かを掴んでみる。

開けた掌には、智くんの温かすら無かった。

地元の中学校に進学した僕は、星がいなくなった秋になると、腸を掻き糞りたくなるくらいに、あの人を思い出し、星の欠片が散らばっていきそうな西原自然公園に行ってみたのだった。

もちろん、そこには星空しかなかった。

小学五年生の転校の前日、私はなんとなく西原自然公園に行ってみた。もしかしたら、智くんに会えるかも……なんて淡い期待を抱いていなかったと言えば嘘になる。そして、やっぱり、あの人が見れることはなかった。

そう、そこには星空しかなかった。

『もう二年も、好きな人を見ていない』

[This story is END;Our story is ENDLESS]